

伝統や文化に関する教育の充実を図る

－古典の音読を通して－

授業づくり支援課授業支援Ⅰ班 長期研修員 佐藤 健

1 主題設定の理由

研究指定テーマ「新学習指導要領を踏まえた授業づくりにかかわる研究」を受け、古典の音読を通して伝統や文化に関する教育の充実を図ることを考えた。

教育基本法(2006.12)の改正により、「第一章 教育の目的及び理念」の第二条に「五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新しく示された。

これを受け、中央教育審議会答申(2008.1)では、「7. 教育内容に関する主な改善事項(3) 伝統や文化に関する教育の充実」の中に、「国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である」とし、国語科では、「小学校の低学年・中学年から、古典などの暗唱により言葉の美しさやリズムを体感させた上で、我が国において長く親しまれている和歌・物語・俳諧、漢詩・漢文などの古典や物語、詩、伝記、民話などの近代以降の作品に触れ、理解を深めることが重要である」と示された。

そして、今回改訂された学習指導要領国語科では、「伝統的な言語文化に関する事項」が新設された。我が国の言語文化に親しむ態度を育てることを目標とし、各学年において古典に親しめるよう、昔話や神話・伝承などの読み聞かせ、易しい文語調の短歌や俳句の音読や暗唱、親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章の音読等が示されている。

これまでの所属校における授業を振り返ると、伝統的な言語文化に関する事項(以下「古典」という。)が学習指導要領で扱われていなかったため、古典に親しむことは計画的に扱っていなかった。

これらのことから本研究では、古典の音読と「言葉への親しみ」の関係を扱うこととした。古典の一つ一つの言葉には、先人の思いが集積されている。例えば、ことわざ、慣用句、故事成語に着目してみても、短い言葉の中に生活の知恵や教訓が表現されている。難解な言葉もあるが、後から実感を伴って分かるようになることもある。

古文や漢文、短歌や俳句においても、古語の持つ心地よい響きを、音読を繰り返すことで自然と感じとれるようになることを考える。こうして言葉に対して繊細な感覚を持つことにより、日本人として、日本の伝統や文化を知ることにもつながると考えた。

本研究では、古典に関する学習活動を「音読」に絞り、「言葉への親しみ」が増すことに有効であるか所属校において探ることにした。

2 研究の目的

「古典の音読」に適した教材を開発し、単元構想を工夫して授業実践するとともに、日常的に継続して取り組むことが、「言葉への親しみ」が増すことに有効であることを検証

する。

3 研究の方法

- (1) 文献や先行研究を読み、「古典の音読」の意義を押さえる。
- (2) 児童の実態を把握するために「古典」や「音読」についての意識調査をし、課題を明らかにする。
- (3) 課題を基に「古典の音読」に適した教材を開発し、単元構想を工夫して、「古典の音読」の取組と日常的な音読指導を継続的に行う。
- (4) 「古典の音読」の有効性を授業での表れや事後のアンケート等から考察する。

4 研究の内容

(1) 「古典の音読」の意義

古典の音読を継続的に研究している先進校や、古典の音読を通して学習効果を高めている研究例などを参考に、「古典の音読」の意義を次のように考えた。

ア 子どもにとって目新しく、興味を持って取り組める

現代文の音読は、よく行われているが、古典の音読はあまり行われていないため、新鮮さがある。また、教科書で扱う古典の文章は短いので、負担感がなく短時間で取り組める。

イ 語感やリズムを身に付けることができる

古典を声に出して読むことにより、語感やリズムの良さを感じられる。印象的なフレーズは耳に心地よく、自然と口ずさむことにつながる。

ウ 言葉に対する関心を持つようになる

古典の語感により、言葉の面白さに気付くことにつながる。また、古典の音読を通して、「語い」（文字・言葉・語句等）、「読み方」（発音・アクセント・間・速さ等）が分かるようになる。使う言葉や言い方が変わるとニュアンスも変わることに気づき、言葉への関心を高めることにつながる。

エ 日本人として、日本の伝統や文化の良さを理解できる

昔のことを現代につながる身近なこととして理解するきっかけになる。今まで自分とはつながりがないと思っていた日本の伝統や文化に触れることで、その良さを認識できるようになる。

オ 古典の名言名句は、身に付いた教養として、ものの見方や考え方を深める

音読して面白い文章は、何度も音読を繰り返すことにより、暗唱につながる。暗唱した名言名句が、座右の銘となり心の支えになることもある。また、故事成語などに小さいころから親しんでおくと、大人になったとき理解できるようになる。多くの言葉を蓄積していくことが、最終的に、ものの見方や考える力を深めることにつながる。

(2) 検証の視点

本研究では、「古典の音読」を行うことによる成果は、「言葉への親しみ」が増す姿

となって表れると考えた。「言葉への親しみ」が増した姿を以下のように考えた。

ア 古典への関心が高まる

「好きこそものの上手なれ」のことわざのように、関心を持っていることほど理解しやすくと考える。古典への関心が言葉を理解する素地になり、言葉を使おうとする意欲の基になると考えた。

イ 語いが増える

古典の言葉の面白さを知ること、今まで意識していなかった日常の言葉にも関心が広がっていく。それが今使っている言葉の意味を考えようという思いにつながり、言葉に対する興味も高まると予想される。多くの言葉に触れることで、使いたい言葉、使える言葉が増えていくと考えた。

ウ 分かりやすい言葉が使える

語いが増えることは、相手に分かりやすく伝える言葉の選択肢が増えることになる。その増えた語いの中から、背景や状況が伝わるその場に合った適切な言葉を選択することができると考えた。

(3) 検証の方法

学年を「古典の音読」の授業をするクラス（以下「授業実施クラス」という。）と古典の授業をしないクラス（以下「未実施クラス」という。）に分け、比較検証した。「古典の音読」の授業を通して期待される子どもの姿を「古典への関心が高まる」

「語いが増える」「分かりやすい言葉が使える」とし、その検証方法を考えた（資料1）。

「古典への関心が高まる」は、アンケートから検証した。古典に関する意識調査を「古典の音読」の授業実践の前後2回（7月、11月）行い比較した。

「語いが増える」は、「ことば集め」により検証した。「ことば」という名詞の上に修飾語をつける活動を5分間行い、書いた修飾語の数を「古典の音読」の授業実践の前後で比較した（資料2）。

「分かりやすい言葉が使える」は、文語調の短歌（以下「和歌」という。）の読み取りにより検証した。和歌の解釈を「古典の音読」の授業実践の前後で行い、自分の思いを適切に伝えているかを比較した。和歌で評価する理由は、次の2点である。

- ・自分の思いを言葉を選びながら端的に表現できる。
- ・短時間で読み取る検証に適した情報量なので取り組ませやすい。

(4) 所属校児童の実態

ア 「古典への関心が高まる」という視点

アンケート調査は、以下のようにした。

【資料1】検証の方法関係対応表

期待される子どもの姿	検証の方法
古典への関心が高まる	アンケート
語いが増える	ことば集め
分かりやすい言葉が使える	和歌の読み取り

【資料2】ことば集めプリント

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	例	だへ けかー けざり 多く書 いてく ださい	名前 ()	3・4・5・6年
ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	美しいことば	名前 ()	ことば集め
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11				
ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば	ことば			

対象：所属校の3・4・5・6学年児童、計506人

時期：2009年7月下旬

項目：中学年 古典への印象 知っていることわざ 音読への印象

高学年 古典への印象 知っている古典の作品 音読への印象

(7) 古典への印象

中学年は、古典の学習の経験がないことから、担任による平家物語「祇園精舎」の範読後、その印象を聞いた。学年の約半分の子どもが、初めて聞いた古典に対して「意味が分からない」など、否定的な印象を持っていた（資料3）。

一方で範読に対し、「美しい」「気持ちよい」などリズムや響きを感じている子どももいた。

高学年の古典に対する印象は、肯定的にとらえた子どもが多かった（資料4）。

古典に対して肯定的な理由、否定的な理由は、次のとおりである。

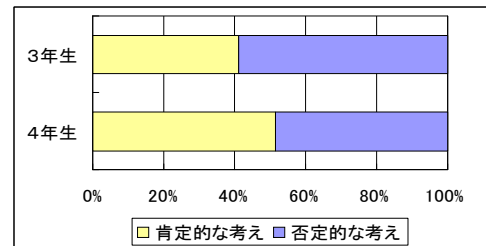
「古典に対して肯定的」

- ・歴史が好きだから好き。
- ・文化的な価値が高いから面白そう。
- ・口語では感じられない響きがいい。
- ・生活に役立つそう。

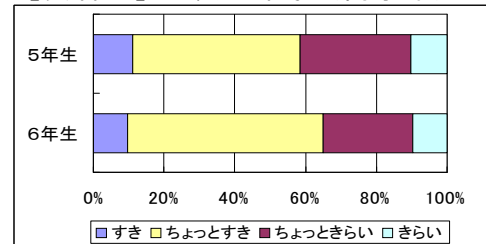
「古典に対して否定的」

- ・意味が分からない。

【資料3】平家物語の印象（中学年）



【資料4】古典の印象（高学年）

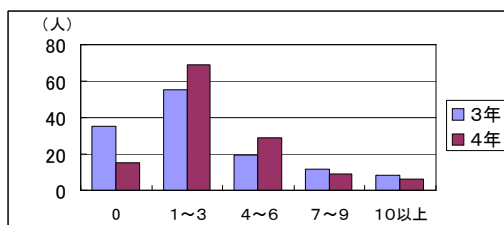


(イ) 知っていることわざ・古典

中学年は全般的にことわざを知っていることが分かった。何も書けない子どもがいる反面、10種類以上書けた子どももいた。知っていることわざの数には個人差が大きいことが分かる（資料5）。

動物に関することわざを多く知っている一方で、「豚にしんじゅう」「九死に一生をおえる」など、ことわざの意味を理解していない表れもあった（資料6）。

【資料5】知っていることわざの数



【資料6】知っていることわざ

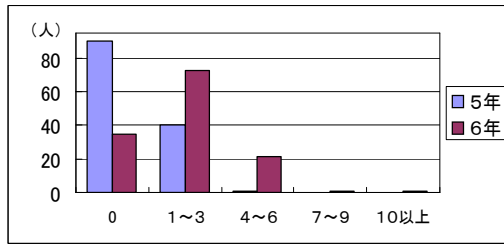
	3年	人	4年	人
猫に小判	51		猫に小判	39
さるも木から落ちる	35		鬼に金棒	32
犬も歩けば棒に当たる	29		さるも木から落ちる	32
鬼に金棒	25		犬も歩けば棒に当たる	29
豚に真珠	22		豚もおだてりや木に登る	15

5年生は、古典の作品を120人中90人が何も書けなかった。また、知っているも1～3種類しかなく、5年生全体が古典に関心がないことが分かった（資料7）。

6年生は、社会科で歴史を扱うためか、5年生より古典の作品を知っていた。中でも清少納言「枕草子」、紫式部「源氏物語」を知っている古典の作品として挙げ

る子どもが多かった（資料8）。

【資料7】知っている古典の作品数



【資料8】知っている古典や文語調の作品

5年		6年	
作品	人	作品	人
じゅげむ	9	枕草子	46
雨ニモマケズ	6	源氏物語	32
松尾芭蕉の俳句	5	竹取物語	32
ふるさと	4	百人一首	10

(ウ) 音読への印象

どの学年も「音読に肯定的」の合計が60%程度だった（資料9）。各学年の半分以上の子どもが、音読に対して肯定的な印象を持っていることが分かった。

音読に対して肯定的な理由、否定的な理由は、次のとおりである。

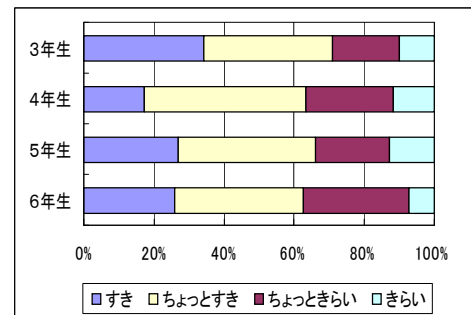
「音読に肯定的」

- ・大きな声を出すと、すっきりする。
- ・作者の伝えたいことが、声を出して読むと分かりやすくなる。
- ・気持ちを込めて読むことが楽しい。
- ・みんなで声を合わせると気持ちがいい。

「音読に否定的」

- ・長い文章を読むと疲れる。
- ・言葉の意味、漢字の読み方が分からないと嫌になる。
- ・みんなの前で読むことが恥ずかしい。

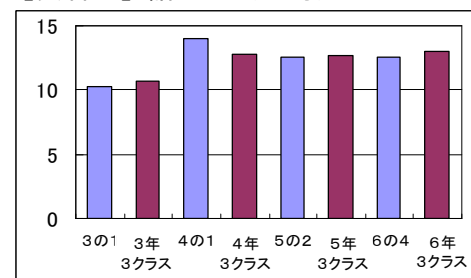
【資料9】音読の印象



イ 「語いが増える」という視点

語い量は「ことば集め」により調査した。うれしい「ことば」、元気が出る「ことば」など、「ことば」と意味のつながる修飾語を当てはめて書いた。授業実施クラスと、未実施クラスを比較したが、授業前の語い量に差は見られなかった（資料10）。

【資料10】語い量（平均）



ウ 「分かりやすい言葉が使える」という視点

和歌の読み取りにより検証した。「東の野にかぎろひの立つ見えて かへり見すれば月傾きぬ」という柿本人麻呂の和歌を読み、心に浮かんだ様子を書かせた。それを作成した評価基準（資料11）で評価した。

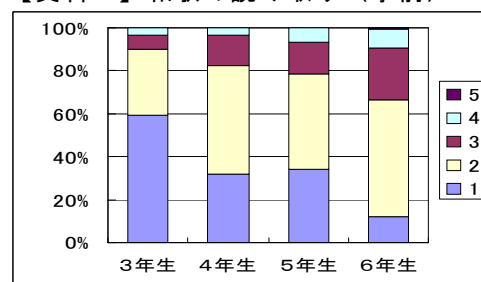
古語の「かぎろひ」に注釈を加えたが、「かぎろひの立つ見えて」が理解できていなかった。そのため和歌全体の情景をイメージできない子どもが多かった（資料12）。

難しいという意識が先に立ち、和歌の情景を分かりやすく伝えようとする気持ちが高まらなかったと考えた。

【資料11】和歌読み取り評価基準

段階	和歌読み取りの表れ	
	読み取る情景①東の～②かへり見～③月～	
5	「3つの情景」の様子を思い浮かべながら、的確な言葉を使って書き表している。	
4	「2つの情景」を自分の言葉で書き表しているが、ぎこちなさがある。	
3	全体的な印象をまとめて書き表している。	
2	古語を現代語に置き換えずに使っている。「1つの情景」を書き表している。	
1	無回答または「分からない」	

【資料12】和歌の読み取り（事前）



(5) 所属校児童の実態を踏まえた授業構想

実態調査から、「大きな声を出すと、すっきりする」「長い文章を読むと疲れる」など、所属校児童の実態が明らかになった。「(2)検証の視点」のうち、「古典への関心が高まる」から、以下のことを考慮して授業構想を立てた。

- ・文章が短い教材の使用
- ・大きな声を出すのにふさわしい内容
- ・心地よさを味わえるように友達と声を合わせる場面の設定
- ・口語訳を添えての古典の文章を提示

子どもにとって興味を持って取り組めるという「古典の音読」の特徴を生かそうと考えた。古典は、音読が得意な子どもには、難しい音読に挑戦してみようという気持ちにさせる。また、音読が苦手な子どもにとっては、初めての学習だからうまく読めないのは当然だという気持ちになる。多くの子どもが意欲的に取り組める「古典の音読」の授業を構想することで、本研究のねらいに迫ろうと考えた。

(6) 「古典の音読」の授業の年間指導計画と授業の実際

ア 年間指導計画

学習指導要領の目標の区分に従い、中学年・高学年に分けて年間指導計画を作成した（資料13）。子どもが興味を持って取り組み、古典に親しむというねらいから、1単元は3時間程度が適切と考えた。今後古典の授業が本格的に導入された際、単元ごとに3時間の授業を繰り返すことによって、古典への関心が高まり、言葉に対する感覚も豊かになると考えている。中学年・高学年ともに3時間の構成を以下のように設定した。

- ・第1時 音読に親しむことを中心とする
- ・第2時 内容を理解した上での音読を中心とする
- ・第3時 自己の音読を振り返る

本研究においては、中学年・高学年ともに年間指導計画を立てたうちの1学期の単元を9月上旬の3日間で実施した。また、古典に触れ続けることが古典への関心を高めることにつながると考え、朝の会、帰りの会等において、「古典の音読」を継続した。

【資料13】「古典の音読」の授業年間指導計画例

単元	【いろは歌】	【短歌・俳句】	【ことわざ・動物のことわざ】	
時期	5月～6月	9月～10月	11月～12月	
	学習活動	学習活動	学習活動	
中学年 内容を理解した上での音読 自己の音読を振り返る	第1時 音読に親しむ	・50音を使った発音練習・呼吸法の練習をする ・「いろは歌」の意味や面白さを知る ・「いろは歌」の音読練習をする	・例示された短歌・俳句を季節毎に分類する ・例示された短歌・俳句の音読練習をする ・例示された短歌・俳句の中から気に入った1句を選ぶ	・動物が出てくることわざを集めて表にする ・動物ごとに分類し、意味も記入する ・表を基にことわざを音読する
	第2時	・「いろは歌」を音読して思い出す ・江戸かるた・京かるたを見て、ことわざの違いを知る ・「いろはかるた」の作り方を確認する ・「いろはかるた」(読み札・取り札)を作成する ・「いろはかるた」のことわざの意味を知る	・第1時で例示された短歌・俳句を音読する ・気に入った1句を選び、浮かんでくる様子を短い文章で表す ・同じ句を選んだ友達とグループを作り、解釈を交流する ・季節の言葉集めをする	・動物のことわざを音読する ・ことわざに出てくる動物をカードに描く ・動物を描きながらことわざを覚える ・「動物ことわざビンゴゲーム」の遊び方を確認する
	第3時	・「いろは歌」を暗唱する ・第2時で作った「いろはかるた」を使って、班ごとに遊びながらことわざに触れる ・「四字熟語かるた」とその遊び方を知る	・例示された短歌・俳句の音読練習をする ・「気に入った1句」を暗唱する ・第2時で探した季節の言葉を使って、短歌・俳句を作る ・作った短歌・俳句を基に友達と交流する	・動物のことわざを音読する ・第2時で作った「動物カード」を使って、動物ことわざビンゴゲームで遊びながらことわざに触れる ・ビンゴになった場合、その1列(4つ)のことわざを暗唱する

単元	【古文：春はあけぼの】	【文語調の歌：おぼろ月夜・やしの実・ふるさと・校歌】	【漢文：矛盾】	
時期	6月～7月	9月～10月	11月～12月	
	学習活動	学習活動	学習活動	
高学年 内容を理解した上での音読 自己の音読を振り返る	第1時 音読に親しむ	・「春はあけぼの」という題名について考える ・清少納言・枕草子について知る ・口語訳を基に季節ごとに「趣がある」ものを挙げる ・枕草子「春はあけぼの」の音読練習をする	・「おぼろ月夜」「やしの実」「ふるさと」の3つの古文を音読し、共通したリズムを感じとる ・3つの古文から好きな1つを選んで音読練習をする	・故事成語「矛盾」を取り上げ、口語訳を基に語源を知る ・「矛盾」の音読練習をする
	第2時	・「春はあけぼの」を音読する ・1日の時刻による呼び方(黄昏時・東雲など)を知る ・十二支を暗記し、当時の時刻についての考え方を考える ・「春はあけぼの」を参考にして、私の「春は〇〇」を作る	・「おぼろ月夜」「やしの実」「ふるさと」を音読する ・選択した1つの古文の情景を絵に表す ・絵を基に同じ古文を選んだ友達と交流する ・口語訳を基に内容理解を深める	・「矛盾」を音読する ・「五十歩百歩」「蛇足」などの語源を調べる
	第3時	・「春はあけぼの」を暗唱する ・友だちと紹介し合う	・「おぼろ月夜」「やしの実」「ふるさと」を暗唱する ・他の歌を選んだ友達と、歌の情景について紹介を聞き合う ・3つのグループに分かれ、自校の校歌の情景を各番ごと絵に表し、校歌の内容理解を深める	・「矛盾」を暗唱する ・第2時で調べた語源を友達と紹介し合う

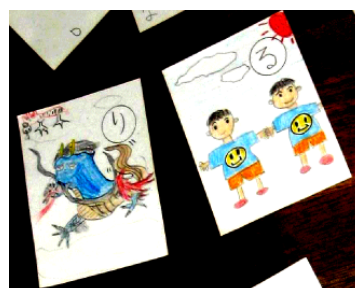
イ 授業の実際

(7) 中学年

文章が短い教材であり、かつ大きな声を出せるという視点から「いろは歌」を扱った。普段慣れ親しんでいる「あいうえお」を並べ替えると、昔の人が作った「いろは歌」になると知るとは、子どもにとって驚きとともに、古典に対する親しみにつながる。「わいうえを」と読んでいた「わ行」が「わゐうゑを」という現代と違う文字だったことを知らせ、無理なく現代と古典のつながりを示すことができた。

第1時は、「いろは歌」の口語訳を知らせることで、「分からないから嫌い」という古典への抵抗を減らすようにした。スライドを使って「いろは歌」の言葉を提示し、それを区切りのよいところで順に消すことで、見なくても言葉がすらすら出るようになった。同時に読み方や読む集団を変えることで飽きずに音読できるようにした。

【資料14】児童作品



第2時は、「いろは歌」のかるたを教材とした。新たに知ったことわざを文脈の中で理解できるように、読み札と取り札をかかせた。かるた作りを通してことわざの理解を深め、定着を図った(資料14)。

第3時は、かるた遊びをしながらことわざを覚える時間とした。多くの子どもが音読できるよう、読み手を固定しないようにした。取り手は、取り札を探しながらつぶやくことが音読につながると考えた。かるた遊びの活動を通して自然に音読が行われるようにした。

(イ) 高学年

所属校児童の実態を踏まえ、アンケートで一番子どもが知っていた「枕草子 第1段「春はあけぼの」」を扱うこととした。

「春はあけぼの」は、今でも変わらない自然の美しさが語られており、所属校の子どもも共感できると考えた。古典への抵抗を少なくするため口語訳を提示し、清少納言が「趣がある」としたものを理解できるようにした。

第1時は、古語の言葉遣いに戸惑うことが予想されたので、口語訳を基に内容の大体を押さえながら音読を行った。全員で音読を繰り返すうちに古語に慣れ、大きくはっきりとした声で、リズムを楽しみながら音読できるようになった。

第2時は、当時の時間の考え方を理解するために、「十二支」を声に出して言わせた。また、「東雲」「黄昏時」などの時間の呼び方も学習した後、「春はあけぼの」を参考にしながら、「春は〇〇」の部分考えた。「春はあけぼの」を何度も読み直すことで内容理解につながり、自分の経験を振り返ることで「趣がある」情景を文章にすることができた(資料15)。

【資料15】 児童作品

春は早朝。
たんぽぽに朝つゆがかかって
光っているのがいい。

夏は夕方。
オレンジ色の空に
セミの声が聞こえてくるのがいい。
外で遊んでいる子どもの声もいい。

秋は夜。
秋は月見。月を見るより
おだんごを食べるのがいい。
くりを食べるのがいい。

冬は朝。
霜柱をふむのがすき。
あのしゃきしゃきした音が
冬を感じる。

第3時は、第2時で作った「春は〇〇」を使って交流し、友達の作品を読み合う時間とした。「春は夕方。桜の花がさらさらと舞い落ちるのがよい。」など季節を感じる作品を作った。友達の作品を読むことで自分とは違った見方を知ることにつながった。本単元の締めくくりとして、「春はあけぼの」を音読した。

(ウ) 授業の成果

どの学年も授業実践を重ねるごとに、古典に対して肯定的な印象を持つ子どもが増え、「これからも古典を学習したい」「他の古典も知りたい」など古典への関心が高まる姿が見られた。

中学年は、覚えたことわざを生活の中で使おうとする姿勢が見られた。難しいと思っていたことわざを覚えられたことが大きな達成感につながった。

高学年は、「春はあけぼの」を参考にしながら「春は〇〇」を考えたとき、「季節にふさわしい情景を伝えられる言葉」「リズムを崩さない言葉」など言葉を選びながら書く姿が見られた。「わろし」「をかし」などの言葉を入口として、現代の言葉との差異を楽しむ子どもが増えた。また、どうして今と言葉が変わったのか疑問に感じ、現代の言葉と昔の言葉の違いを比較して考えるようになった。

ウ 日常的な指導

「古典の音読」が継続して行われるように、授業実施クラスの担任に以下のことを依頼した。

中学年：休み時間（特に雨天時）等に、「いろはかるた」を使って遊ぶ。

高学年：朝の会、帰りの会等で「春はあけぼの」の音読・暗唱を行う。

「古典の音読」の授業後、中学年は、「いろはかるた」を使って自発的に遊ぶ機会が増えた。授業で作ったかるただけでなく、市販の「江戸かるた」等も使って遊ぶようになり、多くのことわざに触れることにつながった。

高学年は、「春はあけぼの」の音読が継続された。四季のうち春と夏は、多くの子どもが暗唱できるようになった。難しい古典の文章を暗唱できるようになることが、嬉しいようだった。授業の中で暗唱ができなかった子どもも、自宅で進んで練習した。

(7) 「古典の音読」の成果

ア 「古典への関心が高まる」という視点

アンケート調査は、以下のようにした。

対象：所属校の3・4・5・6学年児童、計489人

時期：2009年11月上旬

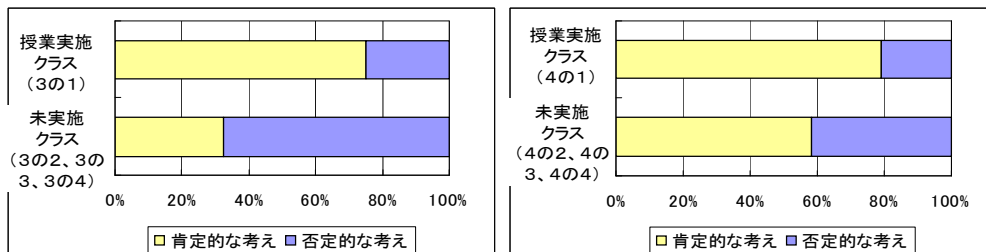
項目：7月の調査と同じ

(7) 古典への印象

中学年は、古典の学習の経験がないことから、担任による平家物語「祇園精舎」範読後、その印象を聞くことから判断した。

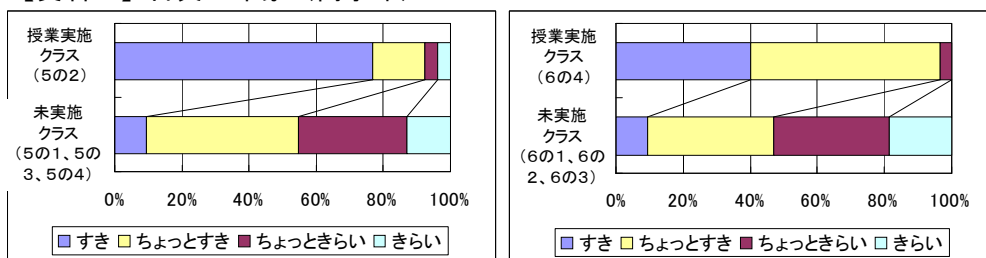
授業実施クラスは、未実施クラスと比べ、古典に対して肯定的な考えを持つ子どもが多かった。「どんなものでも滅びてしまう」「悲しそう」など、内容まで踏み込む子どもや「短歌みたい」「きれいで穏やかな感じ」など、文語のリズムを心地よく感じている子どももいた。一方、未実施クラスは、否定的な印象を持つ子どもが多かった。否定的にとらえた理由の多くは、「意味が分からない」であった（資料16）。

【資料16】平家物語の印象（中学年）



高学年は、古典に対する印象を4項目（すき、ちょっとすき、ちょっときらい、きらい）から選択し、その理由の記述から判断した。授業実施クラスの9割以上の子どもが古典を肯定的にとらえていた。それに対し未実施クラスは、古典を否定的にとらえる子どもが多かった（資料17）。

【資料17】 古典の印象（高学年）



授業実施クラスにおいて、古典を肯定的にとらえた理由は以下のとおりである。

- ・ 古文の意味が分かると、古典の学習自体が楽しく感じられた。
 - ・ 今と昔の言葉の違いに興味を持つようになり、言葉への関心が高まった。
 - ・ 「春はあけぼの」を参考に「春は〇〇」を書いたことで、古典をより身近に感じられるようになった。
 - ・ 難しい古文を覚えることや、音読をして声を合わせることに達成感を味わえた。
- 一方未実施クラスにおいて、否定的にとらえた一番の理由は、5・6年生ともに「意味が分からない」だった。

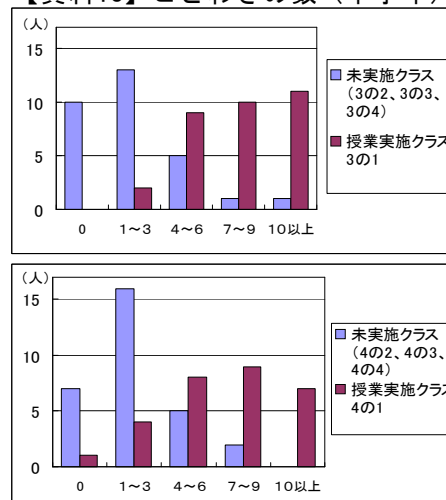
(イ) 知っていることわざ・古典

中学年は、知っていることわざを記述形式で調査した。授業実施クラスは知っていることわざの数が増えたが、未実施クラスは増えなかった（資料18）。授業で作った「いろはかるた」を使って遊ぶことが、日常的に古典に触れることになり、「古典への関心が高まる」ことにつながった。覚えようと意識して覚えたのではなく、かるた遊びを通して何度もことわざを音読し、それを耳で聞くことにより自然と身に付いたと考えられる。

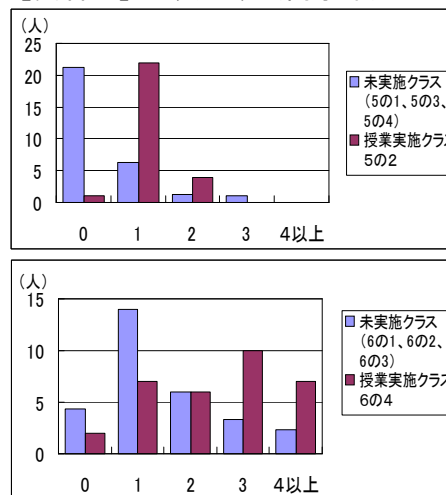
知っていることわざの種類にも変化が見られた。7月の調査では、どのクラスも動物に関するものが多かった。しかし、11月の調査では、授業実施クラスにおいて、「頭隠して尻隠さず」「年寄りの冷や水」のような言葉の面白さを感じさせるものが、多く書かれていた。

高学年は、知っている古典を記述形式で調査したところ、授業実施クラスの方が、未実施クラスに比べ古典の作品を多く書いた（資料19）。「春はあけぼの」の音読を通して古語

【資料18】 ことわざの数（中学年）



【資料19】 古典の数（高学年）



に触れ続けることで、古典への認識が深まり、他の古典作品も意識するようになったと考えられる。教科書教材「短歌と俳句」の学習や、その発展教材として百人一首にも取り組んだことで、和歌や俳句の記述が増えた。

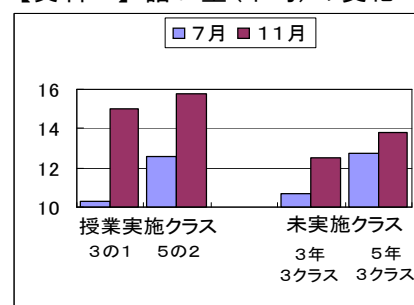
イ 「語いが増える」という視点

「ことば」という名詞の上に修飾語をつける「ことば集め」を行い、その修飾語の数を「古典の音読」の授業実践前後（7月，11月）で比較した。

授業実施クラスは、すべての学年で語いの増加が見られた。特に3・5年生の増加が顕著だった（資料20）。3年生は、かるた遊びの中で、気軽に「古典の音読」を繰り返したことが要因と考えられる。5年生は授業参観で「春はあけぼの」の音読の発表をするという目標を持って音読を継続した。いずれも古語に触れ続けることが、言葉への興味を高めることにつながり、その結果、語いの増加にもつながったと考える。4・6年生でも同様の結果が見られた。

未実施クラスでも語いの増加は見られたが、その増加量は少なかった。

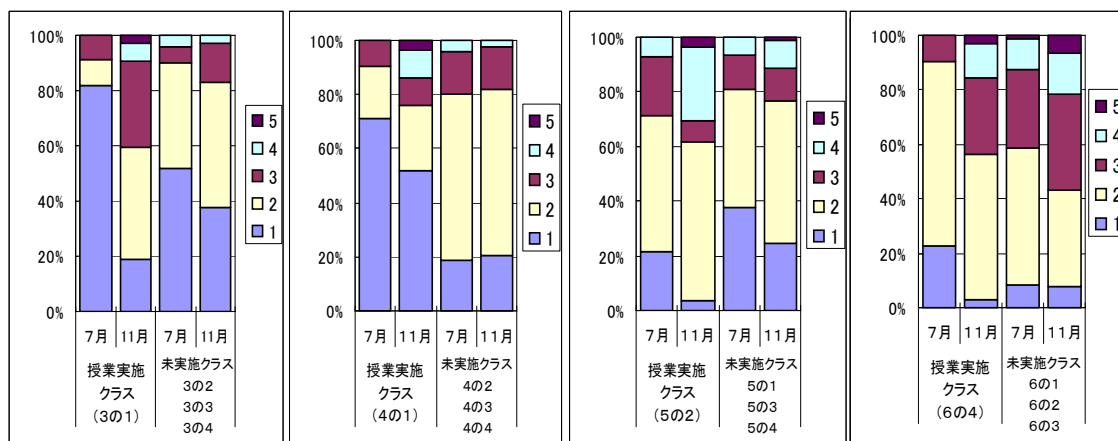
【資料20】語い量(平均)の変化



ウ 「分かりやすい言葉が使える」という視点

和歌の解釈を「古典の音読」の授業実践前後（7月，11月）で、自分の思いを適切に伝えているか比較した。和歌を読み取る力を5段階で評価し（資料11）、7月の調査と比較することで、技能の高まりの変化が分かるようにした。それを授業実施クラスと未実施クラスごとに集計し、各段階の分布の変化を比較した（資料21）。

【資料21】和歌の読み取り



段階1の割合が、授業実施クラスにおいて減少する傾向が見られた。特に3年生の変化は顕著で、7月の調査では80%だった段階1の割合が、11月の調査では20%に減少した。4～6年生でも段階1の割合が20%程度減少していた。

また、和歌で表現されている情景をより分かりやすい言葉で表現できるようになった。授業実施クラスは、成果があると思われる段階4，5の割合が、7月から11月にかけて10%から30%に増加したが、未実施クラスは、あまり変化がなかった。

古典への関心が高まることで、文語で書かれている和歌でも抵抗なく読むことにつながり、自分のイメージをより適切な言葉で表現できるようになったと考えられる。例えば、7月の調査で、「東の野にかぎろひがあることが分かる。月があるから夜なんだと思う。(段階3と評価)」と読み取っていた子どもが、11月の調査では、「東の野原にかげろうが見える。振り返ってみれば月が傾いている様子だと思う。(段階5と評価)」と読み取っていた。7月は作者の視線の動きが書かれていなかったが、11月には東のかげろうを見た後、振り返って西の月を見ている様子が視線の動きとして詳しく書かれていた。このように使っている言葉がより具体的になり、状況をイメージしながら書いていることから推察できる。授業実施クラスの子どもが読み取りを表現した文章には、次のような特徴があった。

- ・古語をそのまま使うことが少ない。
- ・文末を「～な感じ、～な様子」とし、自分のイメージを表現しようとしている。
- ・一文を短くすることで、分かりやすくまとめている。

このような表現が見られたことから、読み取った情景に対し、相手に分かりやすい言葉で伝えようとしていると感じた。

未実施クラスでは、どの学年も授業実施クラスほどの変化は見られなかった。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

ア 「古典の音読」を行うことで、難しいという先入観を持っていた古典に対する抵抗が少なくなった。「暗唱できる」「内容を理解できる」などの達成感を味わうことで、古典を身近に感じるようになった。

イ 「古典の音読」を行うことで古語に関心を持ち、それが現代の言葉に対する興味も高めることになった。そして、現代の言葉に触れる機会が多くなることで、語いの増加が見られた。

ウ 「古典の音読」を行うことで語いが増加し、相手に分かりやすく伝える言葉の選択肢が増えた。それを生かし、自分の思いを適切に伝える言葉を選べるようになった。以上3点から、「古典の音読」が「言葉への親しみ」を増すことに有効と検証できた。

(2) 今後の課題

ア 本研究では中学年の教材を「いろは歌」、高学年の教材を「枕草子 第一段「春はあけぼの」」に絞って実践を行った。学習指導要領に示されている中学年の「易しい文語調の短歌や俳句」、高学年の「他の古文や漢文」などの授業は、指導計画を立てたものの今回は実践を行っていない。年間指導計画に示した「古典の音読」の授業を、実践を通して、その有効性を検証したい。

イ 本研究では「古典の音読」の成果を研究するため、音読を学習の手段とする第3学年から第6学年のみの研究だった。今後、第1学年及び第2学年での古典の授業について研究を進めていきたい。

参考文献

- ・藤本好男著『21世紀型授業づくり98 音読で学校を創る－未来を見つめ今を生きる子どもたち－』, 明治図書, 2004年.
- ・市毛勝雄「文法抜きの音読指導を」『教育科学 国語教育 2008年8月号』, 明治図書, 2008年.
- ・長崎伸仁「今、何のための『伝統的な言語文化』か」『実践国語研究4/5月号』, 明治図書, 2009年.
- ・大越和孝「人間教育としての暗唱を」『教育科学 国語教育 2008年8月号』, 明治図書, 2008年.
- ・大村はま著『大村はまの日本語教室 日本語を育てる』, 風濤社, 2002年.
- ・大嶋大輔「学習者の言語生活を豊かにする古典の指導」『教育科学 国語教育 2008年10月号』, 明治図書, 2008年.
- ・小山進治「小学校中学年における古典教育の在り方－小中一貫を見据えた伝統的な言語文化の入門指導研究－」『月刊国語教育研究 2009⑨ No.449』, 東洋館出版社, 2009年.
- ・重松清、長藺安浩、橋本治、藤原和博著『[よのなか] 教科書 国語 心に届く日本語』, 新潮社, 2003年.
- ・高木まさき「言語力の育成と読書」『教育新聞2009年4月20日号』, 教育新聞社, 2009年.
- ・高橋俊三著『声を届ける 音読・朗読・群読の授業』, 三省堂, 2008年.
- ・堤志織「発見や感動から言葉を見つけて」『実践国語研究2/3月号 No.287』, 明治図書, 2008年.
- ・山口大学教育学部光小学校著『言語活動の充実を図る「視点と方法」のある授業～[とらえかたツール]で授業を変える～』, 明治図書, 2008年.
- ・文部科学省『小学校学習指導要領』, 2008年.
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説－国語編－』, 東洋館出版社, 2008年.
- ・『ひろがる言葉 小学国語 5下』, 教育出版, 2008年.
- ・『ひろがる言葉 小学国語 6上』, 教育出版, 2008年.
- ・『国語 1』, 光村図書出版, 2006年.
- ・『国語六年(上)創造』, 光村図書出版, 2004年.
- ・『みんなと学ぶ 小学校国語 五年上』, 学校図書, 2008年.
- ・『みんなと学ぶ 小学校国語 五年下』, 学校図書, 2008年.
- ・『みんなと学ぶ 小学校国語 六年上』, 学校図書, 2008年.
- ・『みんなと学ぶ 小学校国語 六年下』, 学校図書, 2008年.
- ・『新編 新しい国語 六下』, 東京書籍, 2008年.
- ・加藤郁夫「立命館小学校における『古典』教育の実践」『第116回 全国大学国語教育学会 秋田大会 自由研究発表資料』, 2009年.